

〔報告〕

崎山政毅

立命館大学教員

人々はなぜ、資本に従属し支配され、その〈生〉全体の命運までも握られてしまっているのか。なぜ人間の労働生産物である商品が、資本へと自己生成し、人間社会全体を支配する価値となっているのか。その謎を解き明かす鍵となるのが、《商品〈場〉—商品語の〈場〉》である。

『資本論』冒頭の「資本主義的生産様式が支配する諸社会の富は膨大な商品集積として現れる」という一文は、商品生産—資本主義的生産様式に対する根本的な批判として読まれなければならない。マルクスが『資本論』全体をとおしておこなったのは〈富—価値—商品〉というトリアーデに対する根源的批判だったのである。こうしたマルクスの批判を今日的に継承しようとするものに問われているのは何か。またその作業の中から、現実の資本主義をラディカルに批判し、社会を変革する〈力〉を得ることはいかにして可能になるのか。

こうした喫緊の課題について、『マルクスと商品語』（井上康・崎山政毅著 社会評論社 2017年）の共著者である崎山政毅氏を招いて議論を深めていきたい。

7月21日（土）

● 午後1時 開場 1時半 開始 午後5時半終了

高槻市立生涯学習センター研修室

阪急高槻市駅から線路沿いに西南へ徒歩10分
JR高槻駅から南へ徒歩8分

マルクスと商品語

資本主義の根底的批判のために



連絡先 ルネサンス研究所・関西研究会

〒601-8003 京都市南区東九条西山王町7番地 社会労働センター・きずな気付

ホームページ <https://www.runekenkansai.com/> メール runekenkansai@gmail.com

井上康・崎山政毅『マルクスと商品語』（社会評論社、2017年）

井上康（大学非常勤講師）
崎山正毅（立命館大学教員）

従来『資本論』第1巻をとりあつかう論者たちは、ごくわずかな者を除いて、エンゲルスが1890年に刊行した第4版—いわゆる「現行版」—を対象としてきた。

だが、現行版を第一義的（というよりも精確には、唯一無二の）テキストとする、資本主義批判のための理論的根拠はいかなるものなのか？ そう問われた場合、現行版を主対象とする論者たちから十全な答えが返ってくることは、おそらくない。

われわれはそこに、「版を重ねるにつれて内容が彫琢されたのである、なぜならば、初版からフランス語版、第2版へとマルクス自身による書き換えがあったからだ」という、資本主義批判の規定を欠いた、ある種の「信条」が存在すると考えている。

そうした「信条」へのみごとな反証として、1879年～80年にマルクスが叙述した「アードルフ・ヴァーグナー著『経済学教科書』への傍註」を読むべきである。この『傍註』において、マルクスはヴァーグナーの叙述を徹底的に叩きのめしている。そして、その批判対象の核心こそは、マルクス自身によるドイツ語第2版での叙述であり、批判の起点は初版の冒頭商品論にある。短評ながら、このヴァーグナー「批判」の首尾一貫性と理論的統一性は明瞭である。つまり、マルクスは初本文の視座に立って、自らの第2版の叙述を論難しているわけである。

さて、自らの第2版への書き換えの中軸部は、価値導出の論と価値形態論に存する。前者については後段で詳述することとして、後者についてまず論じておく。

初版本と第2版以降の価値形態論を読み比べれば、第2版のそれが、初本文のものと隔絶していることはまったく明らかである。第2版以降の価値形態論は、初版附録の叙述を引き継いだものである。そのため、第2版以降の価値形態論は、初版附録に示されたのと等しく、ヘーゲルの『エンツィクロペディ』風に区分けされ、簡単な価値形態からの「移行」によって貨幣形態へと到達する叙述になっている。

しかし、初版附録での「移行」は、きちんと読んでみれば瞭然たるものがあるが、いわゆる「弁証法的発展」として叙述されたものと捉えることは困難なものである。単純な価値形態から貨幣形態へと至るより高次の段階への移行・発展、あるいは展開の契機が、理論的な完成度をもって述べられている、と断ずる十分な叙述とは言えない。

これに対して、第2版の価値形態論は、単純な価値形態から貨幣形態へと至る移行・発展・完成を解く叙述に成り変わっているのである。

初版附録から第2版に持ち込まれ、新たなものへと転化した「価値形態論」は、マルクスが亡くなった年末の第3版、それに修正が施された「最後のヴァージョン」たる1890年版（第4版＝「現行版」）へと引き継がれた。

ところで、注意深い読者が必ず気づくこと、すなわち形態間の「移行」が、なにゆえ議論をあれ程までに呼んだのか？ 第2版以降の論理が、論理として十分でないからである。初版附録の「移行」一つを取ってみても、そこに「移行」を必然とするいわゆる「弁証法」を見いだすことは困難である。多くの論者が拘泥した「弁証法なるもの」は、実のところ、マルクスの考えた弁

証法とはまったく異なるもの、たんなる形式論にすぎない。

第2版を基とする現行版をテキストとして対象とする者たちは、不十分な論理に端然たる理路を見いだそうとする。だから、現行版を後生大事にしている論者たちの謂いには、必ず無理がある。いや、無理やりに自説の枠内に問題を封じ込めるという意味での、理の無さがある、というのが正しいだろう。

とは言え、第2版（以降）の叙述が全否定されるはずもない。第2版で初めて言葉が与えられることによって概念として確立され示され、その概念の力によって、初版本文の晦渋さを相当明晰なものへと変えたのが、商品語という概念である。

これら初版附録以降の価値形態論とは決定的に違って、初版本文での価値形態論は、純粋な意味での論理的記述となっている。そこでは、貨幣形態は、まったく論じられていない。三つの形態が（論理的に可能なただそのみが）、社会性の水準の低いものから高いものへと取り上げられている。

本書では、何よりもまず、「商品語」という屹立する概念に基づいて『資本論』冒頭商品論を読み解いた。すなわち、人間＝主体を中心に措くのではなくて、商品を主体とする「商品世界」で展開される支配様態の解明こそが『資本論』冒頭商品論である、という読解を一貫して対置した。冒頭商品論を、他でもなく商品主体の分析として〈読み解く〉ことこそが、『資本論』が有する根源的批判が読者に要請する理論的必然である、確然と提示したのである。これが、本書の成果の根幹をなしている。つまり、「商品世界」の「市民」たる諸商品の「商品語」を、〈聴取・翻訳・注釈〉して人間語の論理において闡明することで、解明されるべき問いへの回答を示しているのである。

その上で、以下の諸点が、本書の理論的到達の核心部をなす。

① 冒頭商品論の出だし部分における価値導出の論理が、初版・第2版・フランス語版でいかに異なっているのか（それゆえ、マルクスの叙述にいかなる混乱が生じたのか）を、本書は各版テキストの比較精読によって明らかにしている。冒頭商品論の出だし部分において、初版では価値が論理的に導出されることなく仮言的（implicit）に措かれてしまっている。これに対してマルクス派、第2版・フランス語版では、価値の論理的導出を目指した。だが、それに十分に成功していない。改訂されたはずの第2版・フランス語版には、叙述上の混乱が明らかに存在する。この事実を、われわれは明らかにした。

② 価値については、詳細かつ緻密に述べる必要がある。というのは、冒頭商品論の核心が価値にこそ存するからである。商品が労働生産物であることは、感覚的に直ちに捉えられることであり、きわめて容易に理解される。そしてまた、商品が貨幣による価格付けを伴っている現実、誰もが認めることである。

こうした直観的に捉えられうる表面的な現象について、古典派経済学は、諸商品相互の関係を表す交換価値を分析し、それを労働に還元した。交換価値の労働への還元—これが古典派経済学に共通する商品理解、すなわち労働価値説である。

マルクスが、アードルフ・ヴァーグナーの著書『経済学教科書』を徹底的に批判したのも、ヴァーグナーがマルクスもまた労働価値説派の一人だと考えて、交換価値の労働への還元を主張している、と捉えたためである。社会的に支配力を持つ〈価値〉と、それを支えるブルジョア的思考枠組みとしての古典派経済学の当時における蔓延を考えれば、ヴァーグナーが古典派経済学とマルクスの学説とを十把一絡げにしたのも、無理からぬことではあった。つまり彼は、当時の政治経済学の「常識」や「通説」に（惰性的に）従っただけだとも言える。だが、「通説的思い込

み」にもとづく「流し読み」によって、ヴァーグナーはマルクスの提示した重要な論点・概念・理路をことごとく無視した。そうした姿勢に対して、マルクスが猛反発したことはあまりに当然と言える。

なぜならば、マルクスは、交換価値から価値を概念的に分離することに大いに苦勞したからである。マルクスの学説における価値論の第一の特徴は、価値の概念を従来のそれから截然と区別されるものへと根本的に刷新したことにある。この概念的な峻別によって、冒頭商品論の地平が、それまでのいかなる経済学理論がもちえたものとも次元をまったく異にする理論的地平への飛躍を遂げたのである。

ところで、古典派経済学は、商品に表わされた労働を二重のものとして捉えることがなかった。それゆえに、古典派経済学には、厳密な意味では、原則として定立されるべき価値の概念は持っていないのである。このことは、別言すれば、価値の概念は古典派経済学にとっては不要なのだ、ということにほかならない。〈交換価値と労働〉、これが古典派経済学のパラダイムなのだ。交換価値の量的比率を労働の量的比率に直接結びつけたわけである。

しかしマルクスは、商品に表わされた労働を二重のものとして把握することによって、交換価値から価値を概念として明確に区分することができた。すなわち、量的関係としてある「交換価値」という諸商品関係において商品をつめるのではなく、商品自体が価値だと捉えた、ということである。

この画期的なマルクスの把握に対して、スターリン主義派経済学はどうか。スターリン主義派経済学は、古典派経済学と異なって、価値の概念をもっている。しかし、マルクスによる、いわゆる商品に表わされた労働の二重性の発見が「あだ」（というよりも「躓きの石」）になって、スターリン主義派経済学の論者たちが見出した「価値」は、商品に表わされた抽象的人間労働に一体化させられてしまう。さらに言えば、そこから賃労働者の「生きた労働」へと、価値がとめどなく横滑りさせられる（あるいはあれこれの具体的・有用的な「労働」と混同させられる）。

こうしたスターリン主義派経済学的「読解」に典型的な特質である、価値の実態論的把握に反発する論者としては、イサーク・イリイチ・ルービンから廣松渉、柄谷行人らまで広く存在する。だが彼らの〈価値＝関係〉説は、価値を観念的な関係においてのみ捉える。そのため、せつかくマルクスが、個々の商品がそれ自体で価値であることを明確にしたのに、このマルクスの闡明を根底から反故にしてしまう。

〈価値＝関係〉説を唱える論者であるならば、価値という「ある関係」が、交換価値という「別の関係」にどうやって現れるのか＝現象するのかを解かなければならない。ところが、この課題に応える者は一人としていない。もちろん価値という「ある関係」を措定し、それとは異なる交換価値という「別のある関係」を措定したとしても、前者が後者に現象することを説くなどということは、そもそも論理的に可能ではない。こうして〈価値＝関係〉説は、古典派経済学とは別の位相で、価値概念を喪失するのである。

スターリン主義派経済学（価値の実体論説）派と〈価値＝関係〉説派が、これまでの『資本論』理解の二大潮流であった。このどちらも、まったく誤っている。それゆえに彼らの間でたたかわされた従来の価値実体をめぐる議論が、不毛なものに終始したのも当然といえる。

彼らの理論的閉塞を見れば瞭然たるように、マルクスがまったく新たに導いた、画期的な価値の概念を把握することは、じつに困難である。価値の概念を正しく把握するためには、価値をたんに諸商品の交換関係の場面だけで考えることなく、それまでの人類の歴史全体と諸社会の全体、とりわけ資本主義的生産様式が支配する社会全体を視野に入れた上で考えることが不可欠であ

る。その作業によってはじめて、マルクスが遂行した、〈富—価値—商品—労働価値説〉への根源的批判を捉えることができるのである。

この課題を本書ははっきりと前景化した。

③ 商品に表わされた抽象的人間労働（すなわち価値の実体）の社会性は、〈自然的—社会的〉関係および〈私的—社会的〉関係という二つの次元において規定されており、とりわけ私的労働の社会的労働への転化は、価値形態論においてはじめて明確に規定される。それゆえ、価値も価値実体も、冒頭商品論出だし部分では未だ十全に概念規定され得ず、価値形態論までいたってはじめて十全に概念規定される。これは「一叩きで何匹もの蠅を打つ」商品語と、時間的系列に従わざるを得ず、それゆえ順々とした問題の開かれを求めなければならない人間語との、圧倒的な差異である。そのために、商品語の〈場〉で一挙同時的・多層的に生起することを、まずは論理的・分析的思惟によって、使用価値（現物的＝自然なもの）を捨象し、価値概念とそれを物的に支える価値実体概念を取り敢えず定立することが求められたのである。これに踏まえて、私的労働がそのままにして社会的労働になることを価値形態論で解明する、という人間語の理路を、マルクスは辿らなければならなかったのだ。ところが従来の論者は、冒頭商品論では商品こそが主体であることをなおざりにし、マルクスの理路を等閑視してきた。われわれの著書では、上記二つの次元における二重の規定をしっかりと踏まえ、価値が概念規定される理路を改めて明確に示した。

④ 初版以降の叙述変更、とりわけ価値形態論におけるそれは、いわゆる「弁証法的深化」といった、イデオロギーに支配された紛い物では決してない。この叙述変更（「改訂」）は、エンゲルスの「歴史叙述」観への摺り寄りにも似た一種の「拝跪」によるものであり、そこに論理の後退が生じている。この事実を、本書は、テキストの理路と関連文献を精緻に追うことで明らかにした。

⑤ 価値形態論における貨幣形態の位置づけを、初版附録以降の一見自立したかのような形態の順置に引き摺られている、従来の「惰性に充ちた無批判な論述」への決定的な反証として、確定した。その上で、一貫した論理的観点から「すべての商品における貨幣存在」の問題として考察することを介して、価値形態が三つであり、ただ三つでしかあり得ないという結論を明らかにした。

⑥ これまで総括的・全体的・国際的に述べられて来なかった多様な論者（先に挙げたルービンをはじめ、スターリン主義派経済学の代表ダフィット・ヨヘレヴィチ・ローゼンベルグ、近年流行りのデイヴィッド・ハーヴェイ、フランクフルト学派につながるモイシェ・ポストン、さらにジャック・デリダ、アルチュセール派、久留間鮫造、宇野弘蔵とその「学派」、岩井克人、柄谷行人等々）の誤謬を、統一されたパースペクティブから明らかにし、理論的批判の俎上に載せて提示した。

⑦ 焦眉の課題として架空資本（グローバルに増殖するいわゆる「マネー」）の問題を前景化し、架空資本の運動が到達した「まったく新たな段階」を本書は明示した。これこそ、現時点で示しうる、今後の作業の理論的基盤である。またこの架空資本概念に基づいて、西洋中心主義に終始してきたこれまでの論を超出して、イスラーム金融の問題も資本主義批判の課題において位置づけた

本書は『資本論』の解説本ではない。

著者であるわれわれ二人もまた、「マルクス神話のもたらす思考停止の惰性」の虜として現行

版に囚われていた過去をもっている。そのために、マルクスが『資本論』を世に問う際に希求した「新たなものを学ぼうと欲し、したがってまた、自分で思考しようとする読者」ではなかった。そうしたあり方への自己批判から出発した本書は、マルクスの知的格闘を跡付けつつ、マルクスさえも十全な叙述に失敗していることを指摘し、彼が言わんとした本質的批判的内容を提示している。その意味において、本書はもとより論争の書である。

読者に対して、われわれが唯一望むことは、かつてのマルクスが『資本論』初版序文の末尾近くに希望と期待を込めて述べた文言と、一切変わることはない。

「学的な批判の、あらゆる判断を歓迎する」。

【コメント】

グローバリゼーションと闘うための実践の書として読む

椿 邦彦（ルネサンス研究所・関西）

なぜモノが商品となるのか。これは人間が最初に商品交換を行ったときから現代にいたるまで、人間にとっては「大なる謎」である。

この問題を歴史学者の勝俣鎮夫は、次のように述べている。モノがモノとして相互に交換されるためには、特定の条件を備えた場が必要であり、それが市場である。市場において初めて、モノとモノとは贈与互酬の関係から切り離されて交易されることになる。市場とはそのような意味で、日常世界における関係が切れている〈場〉として古くから設定されてきたのでないか、と。例えば虹が立つと、必ずそこに「市」を立てなくてはならないという慣習が古くからあった。それは平安時代の貴族の記録にも見られ、室町時代もその慣習の名残が残っていた。このように虹の立つところに「市」を立てるのは、日本だけでなく、他の民族にもそうした慣習があるという。それは虹が、あの世とこの世、神の世界と世俗の世界の架け橋であり、そこでは交易によって神を喜ばさなくてはならないという観念があったのではないかというのである。勝俣の説に従えば、古くから人間は「市」を、モノを商品へと転化させる呪術的な力が働く〈場〉として認識していたことになる。

しかしそのメカニズムはあくまでも「呪術的」なものであり、人間にとっては理解不能なものであった。なぜならこの〈場〉で商品が一方向的にしゃべっている言語は、線形的で加算有限な人間語とはまったく違った、非線形的で非加算無限な商品語であるからだ。商品語を人間語に翻訳するという困難な作業を経ない限り、それを理解することができないのである。井上・崎山両氏は『マルクスと商品語』において、マルクスが資本論第2版で言及した「商品語」という概念に真正面から取り組んで、商品〈場〉—商品語の〈場〉の解明に挑戦したのである。

商品—商品語はその無限性ゆえに、「諸個人—諸言語よりもはるかに『自由』に全世界を徘徊し」、「地域的・国家的・社会的・文化的諸障壁を打ち壊す『重砲列』（『共産党宣言』）」である。それが人間社会にどのような変化をもたらしたのかを『共産党宣言』では次のように描き

だしている。

「人間をその自然的な所与としての上位の者に結びつけていた色とりどりの封建的紐帯を無慈悲にも引き裂き、人間と人間を結ぶものとしては、露骨な利害、つまり、血も涙もない『現金決済』以外のいかなる結びつきも残さないようにしてしまった」

これはそれまで人間を束縛してきた「封建的紐帯」を粉々にしてしまったブルジョアジーの革命的役割に関する記述である。しかし一方で、この「封建的紐帯」とは、「社会的にむきだしの存在になるということにはとうてい耐えることのできない」（ポランニー）人間にとっては、その生存のために不可欠のものである「文化的諸制度という保護膜」でもあったのだ。しかし商品—商品語の世界は、そうした人間の事情には一切お構いなしに、次から次へと人間からその「保護膜」を引き剥がしていくのである。もしもこの状況に人間がなすすべもなく、甘んじているとすれば、いずれ人間は朽ち果ててしまうことになる。だからこそ、資本主義にたいする人々の抵抗は普遍化し、永続化せざるをえないのである。

その必然性を著者らは、「商品自体が価値である」というマルクスの画期的な把握を通して完全に明らかにしたのである。そして「商品語の〈場〉の非加算性」が極めて抽象的なものでしかなく、自然そのものの非加算性に比べれば「底の浅いものでしかない」と喝破し、「まさしくここに、類的存在としての人間が、すなわち自然の不可分な一部でもある類的存在としての人間が、《商品〈場〉—商品語の〈場〉》として立ち現れる自らの類としての在り様をまさしく内在的に超克していくことができる物的な根拠もまた示されている」とより能動的かつ積極的に問題を提出しているのである。

著者らは、《商品〈場〉—商品語の〈場〉》の緻密な分析を土台として、資本の運動と資本物神について解明し、70年代以降、利子生み資本形態を取る架空資本（種々の債権および証券）の運動が、全世界の生産と労働と分配を規制し支配している状況をさして、資本主義が帝国主義段階から、より新しい段階に入ったという。そのメルクマールは、「現実資本から完全に切り離された、歴大な架空資本の運動（負債の運動）」の登場である。資本主義が〈時間的〉外部という、決して消滅することなく、資本主義的生産様式にとって絶対的な限界や制限となることのない運動空間を生み出したのである。

こうした資本の運動に関する分析からわかることは、戦後のブレトンウッズ体制が、多角的決済体制を再建・維持しながら、資本移動に関して規制を加えるという試みがなぜ失敗に終わったのかという理由であり、各国が採用した福祉国家政策によって膨大に積み上げられた国債が、70年代の架空資本の運動を準備し、新自由主義政策への転換を促したという逆説である。であるとするならば、今日のグローバリゼーションとの闘いはいかなるものになるのであろうか。

筆者らは差し当たっての結論として「今日の資本主義は、類的存在としての人間存在総体に敵対し、〈人間〉を全面的に否定するまでにいたっている。それゆえ喫緊の課題は、いかにして〈人間〉を取り戻すか、ということである」と述べている。

それは具体的に言うと、商品—商品語の世界＝市場に支配された社会から人間を取り戻すということであろう。ポランニーにならって言うならば、社会の中に市場を埋め込むと言うことになるだろう。アメリカで起こっている「二つの回帰」、すなわち保護主義と福祉国家という一見すると相反するような二つの傾向への回帰は、実は新自由主義グローバリゼーションによる破壊作用に対する生存のための反作用という意味では共通している。いずれも市場の運動を政治的に制限しようとするものである。例えそれが過去において、不成功に終わったものであるにしても、人間は自己調整的市場による「自己破壊的メカニズムの切れ味を鈍らせるような防衛的な対抗運

動」をあきらめるわけにはいかないのである。

問題は資本のバージョンアップに応じて、人間の対抗運動もまたバージョンアップしなければならないということだ。資本市場に対する規制やグローバリゼーションによる大規模な自然破壊に対する規制を強化することは急務であろう。とりわけ労働力市場をめぐる攻防の重要性を強調しておきたい。2000年を前後する頃から、多くの先進国で契約労働、派遣労働、非正規雇用といった労働問題が重要な社会問題となってきた。これは日本も例外ではない。契約労働、派遣労働、雇用差別と闘っている労働者たちは、賃金格差や処遇面の格差だけを問題にしているのではない。そうした差別的な取り扱いの中で「人間として扱われていないこと」に対する根源的な怒り、これが労働者たちを闘争に駆り立てる原動力となっている。賃金労働者が8割以上を占める先進諸国においては、こうした問題は普遍的な社会問題となっている。いま問われているのは、労働問題に取り組む主体のバージョンアップである。

今、具体的な闘争課題に取り組もうとする人は、ぜひ『マルクスと商品語』を手取るべきだと思う。そこでは、なぜ資本が人々を支配する力を得ているのかについて深く理解することができるだろうし、なぜ人々が資本主義にたいする抵抗をやめないのかということについてゆるぎない確信をわがものとするができると思うからである。（了）